

第②回

【銀杏落葉】

銀杏は生きている化石と言われる。白亜紀末、地球は激変して新生代となった。そのとき銀杏の種を運ぶ恐竜が絶滅し、裸子植物から被子植物の世界に替わった。そのような激変の中を、中国の天目山にだけ生き残った今の銀杏が、人の手で世界に広まり、銀杏は人の暮らしの中で大樹となった。

江戸時代に来日したケンペルたちは、ヨーロッパにない銀杏が、日本で大樹になっているのに驚いた。銀杏の学名 Ginkgo biloba の Ginkgo は、銀杏を記載したケンペルの読み方が、リンネに引用されたものである。

銀杏は公孫樹とも鴨脚樹とも書く。いちようの音は中国語の鴨脚イェチヤクが変化したものとと言われるが異説もある。ぎんなんの音は唐音読みギンナンの銀杏からであろう。

銀杏は雌雄異株である。銀杏の精子が一八九六年、平瀬作五郎によって発見されて世界を驚かせた。その株が生きていて小石川植物園の象徴となっている。

関東大震災の火災から生き残った「震災いちよう」は、変動帯の日本の典型的な自然現象である噴火と地震と津波を常時監視する気象庁の前、内堀に沿ってしっかりと立っている。